

聞書 松山戦争 語る人 - 大木緑氏 -

大木緑氏は、明治28年10月20日生まれ。松山戦争を見聞した世代と歴史を共にした人である。住まいは八日市場市木積（旧匝瑳村）で、松山中台の古戦場は間近かの所である氏は豊栄村村長、八日市場市議会議員を歴任した。

明治元年10月頃、天狗派に敗れて江戸へ向かう諸生派は銚子から忍坂（現飯岡町）を下っていた。ここでも両派の間で小競りあいがあって、戦死者が出ているのです。

諸生派は八日市場へ逃げて来て、福善寺へたてこもりました。あの頃諸生派は百人といっていましたが、今となっては、はっきりした人数は分かりません。天狗派の方は、水戸から南へ来るにつれて、博徒が途中から加勢にきて、大変な人数になっていたのです。

その頃、八日市場に、深田長四郎という顔役がおった。当時は磯長といって、今でも市内で呉服屋をやっている。この深田長四郎が、「福善寺で戦争をやられては困る。どうか立ち退いてくれ」と、町の人々を代表して、福善寺諸生派の所へ出かけて行つたのです。これに対して、市川らは「我々は寺から退却するから路銀を出してくれ」と言ってきた。諸生派は逃げたくても金がなかったのだ。そこで、深田は、自分が百両、町の人々から二百両、合わせ手三百両を出して、ようやく諸生派に立ち退いてもらったのです。かくして、諸生派は山門に火をかけて松山台に退いたのです。

松山台で、追って来た天狗派は、南に主力を置き、東、北の三方から諸生派を取り囲んでわずかに西だけあけておいた。これはその頃の戦争の常識で、敵を包囲した時には一方を必ずあけて敵の逃げ道を作り、味方の損失を少なくしたのです。戦争は2時間位続いた。

ここでは朝比奈弥太郎（元執政）一族は、下僕に至るまで全員が死んでいます。彼らは朝比奈弥太郎に日頃から恩義を感じてのことでした。福善寺の住職に聞いてみると逃げきれなかつた諸生派が三人いたが、追って来た天狗派のために寺で処刑されてしまった。この事は寺の書き物にも残っている。

戦いに敗れた諸生派は栗山川（松山村の西六キロ）の江戸街道の新井渡しを通って逃げたそうです。

豊栄村では、逃げきれなかつた負傷者三名が死んでいる。この三人とも首がなかつた。墓は飯倉（現小学校付近）に二体いっしょに埋められ、30年頃、私が豊栄の村長時代に、駐在所からの要請で供養したことがある。今でも墓はあるだろう。

木積では、民家にかくれていた二人の諸生派が、二、三日やっかいになって、逃げて行った。この人たちの名前はわからない。二人は、自分の持っていた武器を民家に置いて、平服（百姓姿）に変装して逃げた、という話が伝えられている。木積では、戦争が始まつて鉄砲の音がするし、福善寺が大火事なので、近くの人々は戦争を見に行ったといいます。この人たちとは、逃げて来る諸生派五人に途中で出逢つたそうです。しかし農民に危害を加えず、新井渡しの方へ向かって行ったそうです。これらの村の人々が、小さい頃の私たちに話を残してくれたのです。

松山台の25人の戦死者の首は、八日市場の桐屋旅館に本陣を置いていた尼子扇太郎（追討軍々将）の所へ送られました。そして本陣の前に並べられたそうです。この首をかついで行った村の人々は褒美を貰えると思って運んだそうですが、「おまえたち、ごくろう」と言われただけでした。こんな話も残っているのです。

八日市場にいた天狗派には、途中から加わった不頼の者がいたので多少の被害はあった。近くの歌に「鐘は筑波の上にあり」というのが残っている。つまり、八日市場の寺にあつた鐘をはずして、売りとばしていく天狗派のことを唄っているのです。天狗派の持ち去つた鐘は天狗派の発生の地である筑波山に持つて行ったのだろう、という意味なのです。

八日市場の天狗派は、ケットウという赤色の毛布を着用している者が多かった。また地元には諸生派の死骸から金を奪つて裕福になった人もいると言われている。三百両の金を分けて、持つたままの諸生派もいたのですから、そういうこともあったかもしれない。

脱走塚は、もとは簡単なものだった。旧道はもっとせまかったが、今のは、改葬して広くしたものです。

墓石の前に 25 穴あいたものがありますが、これは線香を立てる穴ではありません。村の人々が諸生派を供養して秋葉の実を上げたのです。秋葉の身は鉄砲玉の形をしています。お前らが負けたのは、鉄砲玉が無かったからだ。かわいそうに、という意味が込められているのです。おそらく、松山戦争を見聞した人から話を伝え聞いているのは、もう私一人になっているでしょう。

(昭和 55 年 6 月 15 日談)